

# エチオピア南東部の中世イスラーム遺跡群

—オロミア州西ハラルゲ県・東バレ県の遺跡踏査報告(2025年)—

遠藤 仁 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所ジュニア・フェロー

大場 千景 エチオピア・アルシ大学助教

ナシール・アハマド エチオピア・オロミア州文化観光局職員

渡邊三津子 文教大学准教授

石川 博樹 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所教授

## Medieval Islamic Sites in Southeastern Ethiopia: Archaeological Survey in West Hararghe and East Bale Zones, Oromia Region in 2025

ENDO, Hitoshi Junior Fellow, Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies

OBA, Chikage Assistant Professor, Arsi University, Ethiopia

NASIR, Ahmad Staff, Oromia Culture and Tourism Bureau, Ethiopia

WATANABE, Mitsuko Associate Professor, Bunkyo University

ISHIKAWA, Hiroki Professor, Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies

### 1. はじめに

アラビア半島の西の対岸、アフリカの角地域は古くから西アジア地域と様々な形で交流が行われてきた。それは人や物の移動だけではなくキリスト教やイスラーム教といった宗教の伝播も早い段階で行われ、内陸部のエチオピアでは、独自のキリスト教文化が開き、世界遺産に選定されたアクスム(Aksum)やラリベラの岩窟教会群(Rock-Hewn Churches, Lalibela)など、数多くの建造物が残されていることが知られている。その一方で、現在のエチオピアの人口の3割強はイスラーム教徒である。エチオピアにおいてイスラーム教はアデン湾に面した諸港とエチオピア中央部を結ぶ交易路沿いにまず広まり、その後さらに内陸部へ伝えられ、現在では同国の東部や南部に多くのイスラーム教徒が居住している。

エチオピアにおけるイスラーム研究は、世界遺産に指定されている城塞都市ハラル(Harar Jugol)や、世界遺産暫定リストに載るシェイフ・フセイン廟(Dirre Sheik Hussein)などを中心に行われている。考古学研究としては、フランス隊によりノラ(Nora)遺跡およびその周辺、イギリス隊によりハルラー(Harlaa)遺跡およびその周辺のイスラーム教関連遺跡の発掘・分布調査が実施され、2010年代以降その成果が続々と発表されている(Pradines 2017, Insoll 2021など)。しかし、これらの調査は限定的であり、本発表の対象地域

であるエチオピア南東部では考古学的調査は実地されておらず、遺跡の分布状況も未だ明らかになっていない。

上記のような研究状況の中、文化人類学者の大場千景は、エチオピアで最も人口の多い民族であるオロモ(Oromo)の口頭伝承研究(Oba-Smidt 2016)の中で、エチオピア南東部に点在する石造建造物などの遺構群に関して、先住民であるハルラ(Harla)と呼ばれる人々が残したという伝承が広範囲に分布していることに気づいた。伝承によると、ハルラと呼ばれる人々は、広く交易を行っていたイスラーム教徒であり、何世代も前に去り現在は周辺には居住していないという。ハルラに関しては、大規模な石造建造物を残したことから巨人であるとの伝承もある(Østebø 2012)。考古学を専門とする遠藤仁は、大場の協力要請を受け、ハルラと呼ばれた人々ほどの様な集団であったのか、どの様な理由で遺構群を放棄して去ったのか、そもそも広範囲でハルラと呼ばれた人々は同質の集団なのかを明らかにするために、エチオピア南東部のオロミア州西ハラルゲ県と東バレ県を対象に遺跡の分布調査および簡易測量を大場とともに実施した(図1)。

### 2. オロミア州西ハラルゲ県の調査

エチオピア南東部における調査は、2023年8月にオロミア州文化観光局の支援を受け、オロミア州西ハラルゲ県でまず予備的に実施した。その調査における

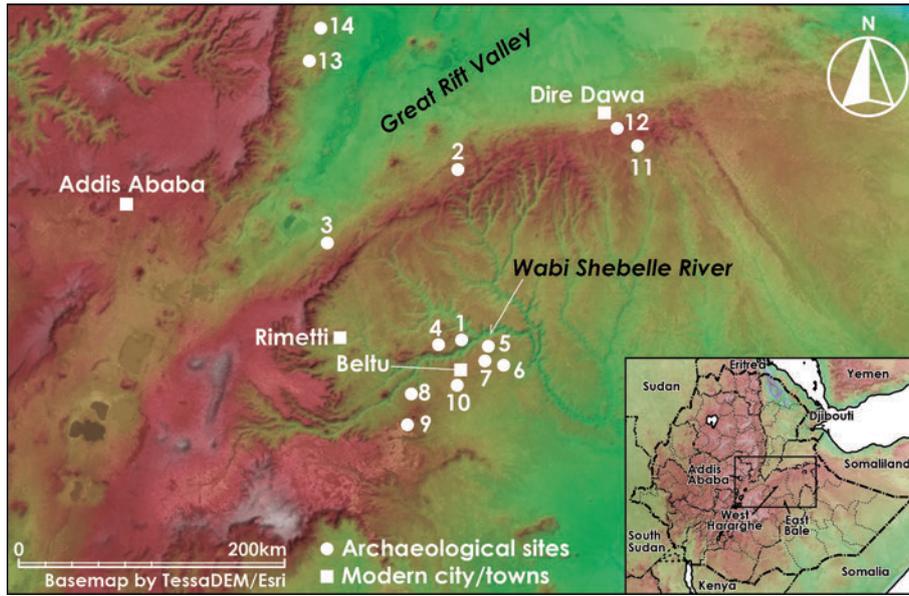


図1 エチオピア南東部の中世イスラーム遺跡

1 Sakate、2 Hula Dheera(Direbelo)、3 Dhibiiftuu、4 Mataqoma、5 Bare-Biiyyoo (Hayyadin)、6 Galajaru-Mudhii(Amiiluu Nuura)、7 Hero、8 Dirre Sheikh Hussein、9 Balla、10 Dabballee-Halaa-Eeguu、11 Harar、12 Harlaa、13 Nora、14 Asbari

最も大きな成果としては、サハラ以南アフリカでは有数の規模のモスクを中心とするサカテ(Sakate)遺跡の確認である(Endo & Oba 2024)。サカテ遺跡は、大規模な遺跡であるにもかかわらず、周辺住民以外には認識されておらず、国内外の研究者や行政関係者に把握されていなかった。また、既知の中世遺跡が立地する大地溝帯に面する地域ではなく、ソマリアへと流れるワビ・シェベレ(Wabi-Shebelle)川流域の標高約1500mの緩斜面に立地する。これまでの研究史上、未知のサカテ遺跡の造営年代や造営集団の解明はエチオピアだけではなくアフリカの角地域の中世史研究上重要であると考えられる。

サカテ遺跡については2023年の確認後、高解像度衛星画像で遺跡範囲の精査を行うとともに、2025年9月にも再調査を実施した。サカテ・モスクは、27.6×28.7mの石造建造物で、天井は崩落しているものの、内部に24本の石積みの円柱の痕跡が残り、釣鐘型ミフラブ(聖地マッカの方角を示すキブラ壁に設置された窪み状の設備)の他、4カ所の入口(2カ所は封鎖されている)、4カ所の窓、18カ所のランプを置くための窪みが残されている。壁面の一部には漆喰が残り、入口には梁の木材が残されている。モスクは基壇の上に建てられおり、その南側には柱列が残るため、庇が設けられていた可能性があり、東側に存在する石積み遺構はその形状から礼拝前の手洗い場(ウドゥ)と考えられる。また、モスクは1辺50mの方形の周壁で囲

われている(図2、3)。サカテ遺跡にはモスク以外にも、複数の貯水池、住居址、墓域と、それらを囲う全長1kmの周壁、見張り台と考えられる周壁に付随する石造建造物などが確認できており、推定範囲約0.74km<sup>2</sup>の集落遺跡であると考えられる。貯水池は3カ所確認できており、いずれも石を積んだ後土塁で補強する頑強な構造であり、周壁は集落範囲の東と西の部分に築かれ遺存状態が良い場所で高さ3mにおよび、門も確認できる。帰属する年代は、表採された土器片からエチオピアのイスラーム考古学研究で「中世」と呼ばれる時期(11~15世紀)と推察される。

サカテ遺跡の近傍では、2025年の調査時に同遺跡の西側の丘陵上でマタコマ(Mataqoma)遺跡が確認された。この遺跡は14.3×11.2mの天井が崩落した石造建造物のみが確認されているが、遺構の下部が埋没しており、入口などは確認できていない。同様にミフラブの確認はできていないものの、遺構の規模などからモスクであると推定され、その石積み技法などから年代はサカテ遺跡と同時期、中世と推測される。

その他では、大地溝帯に面した地域で以下の2遺跡を2023年の調査で確認した(Endo & Oba 2024)。

フラ・デーラ(Hula Dheera)遺跡は、フランス隊の分布調査でも確認(Chekron et al. 2011ではDirebelo遺跡と記録)されており、丘陵の頂点に1辺12mの方形の石積みのモスクと3基の墓のみが遺存している。モスクは天井が崩壊しているものの、壁面の一部に漆

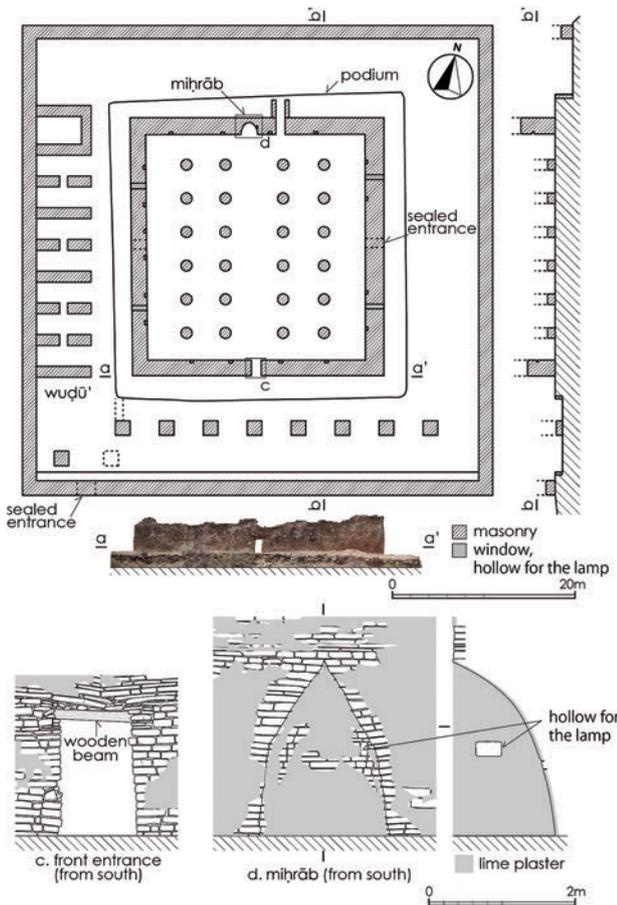


図2 サカテ遺跡のモスクの平面図



図3 サカテ遺跡のモスクの正面

喰が残り、釣鐘型ミフラブや2カ所の入口も確認できる。表採された土器片から、遺跡の年代は中世と推測される。

ディビフトゥー(Dhibiiftuu)遺跡は、数百基の墓が南北に延びる尾根上に3kmにわたり分布し、その他は石列などが部分的に遺存しているもののそれらの性格は不明である。墓は、石を長方形に組み合わせたもので、土盛りなどは行われておらず、一部盗掘された墓の状況から、地表から1m以上下に被葬者は埋葬

されていると推測される。ほとんどの墓は石を組み合わせた単純なものであるが、その石の一部に装飾を施したものや、アラビア文字が刻まれたものが数基確認できる。表採された土器片や石製ビーズから、遺跡の年代は中世と推測される。

### 3. オロミア州東バレ県の調査

西ハラルゲ県のサカテ遺跡近隣に現在居住する住民は20世紀前半に、ワビ・シェベレ川の対岸に位置する東バレ県から移住してきたという。彼らに対する聞き取り調査から、東バレ県にもサカテ遺跡と同時代のものと伝えられている古いモスクが点在しているとの情報を得た。そこで、東バレ県で2025年9～10月にかけて調査を実施した。

まず、サカテ遺跡の南に位置する地域の踏査を行い、同遺跡と近似する時期と考えられる、研究者や行政関係者に把握されていないモスクを中心とする以下の遺跡を3カ所確認できた。

バレ・ビーヨー(Bare-Biiyyoo)遺跡は、現在周辺に居住するオロモの人々からハッヤデーン(Hayyadin)のモスクと呼ばれ、近年まで雨乞いなどの儀礼の場として機能していたという。遺跡は15.4×14.4mの石積みのモスクと、モスクの囲う周壁のみが遺存している。モスクは天井が崩落しており、2カ所の入口とミフラブが確認でき、壁面の一部に漆喰の痕跡が残り、柱などは確認できない。周壁は1辺25mほどであるが、周辺住民により石材を確保するために崩されており、明瞭ではない。また、土器片などは表採できておらず年代の確認は困難であるが、西ハラルゲ県のモスクと構造上の類似が認められるため、中世のものと推測できる。

ガラジャール・ムディー(Galajaru-Mudhii)遺跡は、現在の集落から少し離れた小高い丘の上に立地し、近隣住民からアミール・ヌーラ(Amiiluu Nuura)のモスクと呼ばれている(図4)。遺跡は18.1×18.4mの天井が崩落した石積みのモスクと、その北側に機能不明の1辺7mの方形の石造建造物がある。これらの遺構は整地されたと考えられる丘の頂点に建てられており、丘の中腹には数基の墓が点在している。モスクには釣鐘型ミフラブがあり、壁面の一部に漆喰が残り、内部に石積みの円柱12本遺存しており、円柱は高さ2m以上遺残しているものもある。モスクの壁面が崩れかけているため不明瞭ではあるが、少なくとも1カ所の入口と1カ所の窓が確認できる。この遺跡も土器

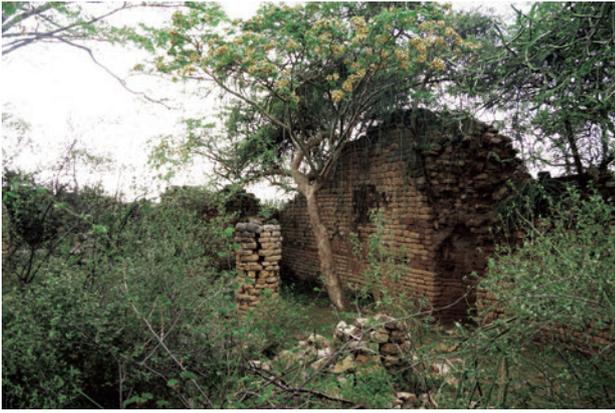


図4 ガラジャル・ムディー遺跡のモスク内部の状況



図5 ダッバリー・ハラー・エーグーのモスク

片などは表採できておらず、年代の確認は困難であるが、モスクの構造などから中世のものと推測できる。

ヘロ(Hero)遺跡は現在も人が居住する村内にある11.7×11.0mの石積みのモスクである。モスクは、数十年前に基礎を残して崩壊し、その後再建されたという。そのため、上部構造は本来のものから改変されている可能性はあるものの、2ヵ所の入口とミフラブが存在する。ヘロ遺跡の年代は、モスク再建時に見つかり保管してあった土器片から中世と推測される。

上記の3遺跡の近傍に、古いモスクがあるとの情報で訪れたダッバリー・ハラー・エーグー(Dabballee-Halaa-Eeguu)は、モスクの構造が他の遺跡と著しく異なっていたため、詳細な聞き取り調査を実施した。その結果、ハイレ・セラシエ1世の時代(1930~1974年)にオロモの人々により建てられたものであることが確認できた。これまで中世のものと判断したモスクは、いずれも板状に加工された石灰岩や砂岩などを精緻に積み、小規模なものでも1辺が10数mにおよぶ方形の石造建造物であったが、このモスクは8×12mと一回り小さく、隅丸方形を呈し、壁面も成形していない溶岩を乱雑に積んだものである(図5)。このモスクの存在から、オロモの人々の建築技法の一端がうかがえ、本調査で確認した他のモスクはオロモとは異なる建築技法を持った集団によるものである可能性が高まった。

東バレ県では、シェイフ・フセイン廟近傍にも古いモスクがあるとの情報があり、測量などの調査はされていないものの、同地域の歴史研究者のT. オステーボにより確認されている(Ostebø 2012)、バッラ(Balla)遺跡の調査も行った。この遺跡はモスクとその周辺を囲う周壁、壁外に少なくとも4基の墓とウドゥと考えられる1辺2.5mの方形石造建造物、モスクの西

側の貯水池で構成されている。モスクは石積みで天井が崩落しており、35.8×28.2mとサカテ遺跡のモスクに匹敵する規模で、ミフラブと4ヵ所の入口、36本の石積みの円柱の痕跡が残っている。周壁は変則的な6角形で、4ヵ所の入口と少なくとも2ヵ所の排水孔は設けられ、全長200mにおよぶ、高さ1mほどが遺存する石積みのものである。遺跡近隣の住民によると、周辺に墓が点在しているという。この遺跡も土器片などは表採できていないが、年代はモスクの構造から中世と推測される。

#### 4. まとめ

エチオピア南東部の中世イスラーム関連遺跡の分布調査を行った結果、これまで研究者に知られていないモスクを中心とした、未調査の遺跡を複数確認できた。遺跡は徒歩で険しい道を20km近く歩かなければ到達できない場所にあるものもあり、調査自体が困難であるためこれまで認知されてこなかったと考えられる。これらの遺跡周辺に現在居住しているオロモの人々によると、自分たちの祖先が造ったものではないと認識する同様の石造建造物は、本調査で確認した以外にも複数存在するという。

本調査においては、遺跡の帰属年代が曖昧な状態であり、表採できた土器片を唯一の指標としたが、年代の比較対象とした発掘資料であるハルラー遺跡(Tait & Insoll 2021)は、本調査の遺跡群とは180kmほど離れ、土器の様相も若干異なっており、独自に土器分析をする必要がある。またサカテ遺跡以外は、モスクや墓以外に居住域の遺構を確認できていない。遺跡の年代や機能などを確認するために、将来的には発掘調査やより詳細な分布調査を実施し、出土物の放射性炭素年代測定や独自の土器編年の構築などを通して、遺跡

群の年代を特定する必要がある。発掘調査のための準備を進めているものの、年代の確定は今後の課題としたい。また、本調査で訪れた遺跡はいずれも植生などで風化や破壊が進行しており、早急に調査や現状維持のための施策が求められる。遺跡の保存のための意義や対処方法に関しても、オロミア州文化観光局や西ハラゲ県および東バレ県の行政官と対話を進めている。

本調査は、アフリカの角地域のイスラーム史の空白域を埋める可能性があり、また同地域の民族移動に関しても新知見を得られる可能性があると考えられる。確認した遺跡群は、現在同地域に居住しているオロモの人々の移動以前に築かれたものだと推測されるが、オロモの移動に関してはこれまで、口頭伝承(Oba-Smidt 2016 など)や、別の民族の手による文献資料(石川 2008 など)で考察され、考古学的な検証はほとんど行われていない。そのため、オロモ以前に同地域に住んでいた人々の実像の一端が解明できれば、同地域の民族移動の歴史の解明の一助にもなる。今後も新たな協力者を募り、調査を継続していきたい。

本調査は、2023、2025年ともにオロミア州文化観光局(Oromia Culture and Tourism Bureau)の援助を受け、2025年は科研費(25K04476)を受けて実施した。ま

た高精度地形データの購入に東京外国語大学フィールドサイエンスcommons(TUFiSCo)の予算を用いている。

#### ■参考文献

- ・ Chekron, A., F.-X. Fauvelle-Aymar, B. Hirsch, D. Ayenachew, H. Zeleke, O. Onezime and A. Shewangizaw 2011 Les Harla archéologie et memoire des Geants d’Ethiopie. in F.-X. Fauvelle-Aymar and B. Hirsch (eds.), *Espaces Musulmans de la Corne de l’Afrique au Moyen Âge*, 75-98. Paris, De Boccard.
- ・ Endo, H. and C. Oba 2024 Anthropological and Archaeological Survey of the Harla Related Medieval Sites in West Hararghe Zone, Oromia Region, Ethiopia. *Nilo-Ethiopian Studies* 29. DOI: 10.11198/niloethiopian.29.rr01
- ・ Insoll, T. 2021 The Archaeology of Complexity and Cosmopolitanism in Medieval Ethiopia. *Antiquity* 95 (380): 450-466.
- ・ Oba-Smidt, C. 2016 *The Oral Chronicle of the Boorana in Southern Ethiopia: Modes of Construction and Preservation of History among the People without Writing*. Hamburg, Lit Verlag.
- ・ Østebo, T. 2012 *Localizing Salafism: Religious Change among Oromo Muslims in Bale Ethiopia*. Leiden & Boston, Brill.
- ・ Pradines, S. 2017 The Medieval Mosques of Nora Islamic Architecture in Ethiopia: Nora, a Muslim Town of the 13th-15th Centuries. *Journal of Oriental and African Studies* 26: 33-79.
- ・ Pradines, S. 2022 *Historic Mosques in Sub-Saharan Africa: From Timbuktu to Zanzibar*. Leiden & Boston, Brill.
- ・ Tait, N. and T. Insoll 2021 Local Ceramics from the Islamic Trade Center of Harlaa, Eastern Ethiopia: Markers of Chronology and Contacts. *African Archaeological Review* 38: 419-442.
- ・ 石川博樹 2008 『『ガッラの歴史』訳注』『アジア・アフリカ言語文化研究』76: 87-107頁。